

こどもの絆 プロジェクトを通じて

東日本大震災に対して
自分に何ができるか

東日本大震災から二年半経とうとしてい
ます。

こどもの絆プロジェクトを通して、大勢
の方々とお会い、話し、笑い、泣きました。
大勢の支援者・協力者に感謝をし、福島
の家族や親族の方々にお礼を言っていた
きました。

よく言われている、住民同士の縦・横・
斜めの繋がりが減っている中で、改めて
繋がり大切さを考えさせられるプロジェ
クトにもなりました。

なんて書こうかな



最初のきつ
かけは、大震
災に対して何
かできない
か？自分達に
できる事は何
か？愛媛にい
てできる事
は？など考
え、出た答え
が「愛媛に呼
んで体験学

習を行う事」でした。福島県には繋がりが
なく、活動する母体もなく、あったのは愛
媛県内の公民館職員同士の横の繋がりでし
た。そこから声をかけあい、少しずつ広
なり「こどもの絆プロジェクト」の立上げと
なりました。市を超えた熱い想いの人の繋
がりでした。

それから、勢いで始まった冬休み・海で
泳がせたかった夏休み・活動の大切さを考
えた冬休み・子どもの成長とボランティア
の成長を考えたこの夏休みと、四回の活動
が終わりました。

こどもの絆プロジェクトの目的

活動の目的は、「福島の子ども
達にリフレッシュの場を提供
する」「東日本大震災での出
来事・その後の現状を伝え
てもらおう」「福島と愛媛の
繋がりをつくる」「愛媛の
良さを再認識する」「ボラ
ンティアのココロを育む」
などがあります。

愛媛に来て、ただ遊んで帰っ
ただけ、旅行をしたただけ、そのよ

ばちやばちピース



うな活動をしたいわけではありません。「震
災があつて苦しいこともあつたけど、愛媛
での思い出もできたよね。」とは感じて欲
しいですが、活動の中に目的を持ち、近い
将来に復興の担い手となる子ども達の成長
や、福島県にも愛媛県にもプラスになれる
ような活動として計画をしました。

市を超えた関係からの成長

スタッフは公民館職員の集まりですの
で、仕事の範囲は小学校区であつたり、地
域であつたり、大きくても市町の中になり
ます。この活動では市町の壁は無く、互い
に協力をし合い、一緒にプログラムを完
成させます。四回の活動で、今治

市・西条市・新居浜市・伊予
市・松山市と八市で開催し
ました。普段、仕事の内容は
一緒でも手法は違いますの
で、互いに協力し合い、新し
い知識を持って帰り職場で
活かす、職員同士の研修にも
なっています。同業者ではなく、
仲間のようになっています。



こどもの絆プロジェクト
代 表
青野 信久

地域住民との関係、縦・横・斜めの関係

プログラムにはこだわりもあり、その中でも交流を特に大事にしています。現在までに、八市で行い、それぞれの市で地元の同年の児童との交流をしています。子どもは仲良くなるのは早い！と言われてますが、仲良くなるのは本当に早いです。交流のお別れの時には、「また愛媛においてよ！」「来年も遊びに来るからね。」なんて言葉が飛び交っていて、こどもの日記にも「新しい友達ができた」と書いてあり、少し遠いですが友達ができています。



みんなで地引網

ボランティアには一緒に生活をする大学生だけでなく、地元の自治会や婦人会から近所のおいちゃん、おばちゃんまで参加してくれていて、異世代の交流も行っています。時には、大学生のボランティアまで怒られることもあり、プログラムの間は集まっている人の中で新しいコミュニケーションができることもあります。

住民同士の繋がりが

の希薄化と言われていますが、プログラム中の風景にはたくさんの繋がりがあり、この繋がりを多くすることが公民館の役割でもあります。あるんじゃないかと感じたりもしています。

プロジェクトの効果は？

活動の効果は、大きく二つあると思っています。

一つ目は、福島の児童の成長です。

あずかっただ子どもは成長して親元に返せるようにと、学生ボランティアにも言っていることもあり、愛媛から福島に帰り、学校の先生や親族から良い方に変化があったとお礼が届くときがあります。去年の夏に参加した親からは、震災後は保健室登校で授業には参加できなかった娘が、授業に出られるようになりました。涙声のお礼の電話がありました。ちょっとずつですが、復興の支援ができていますと感じました。



近寄ると 濡れるぜ

二つ目は、ボランティアの成長です。一緒に生活をするボランティアには大学生を中心に、中学生や高校生も参加しています。毎日、プログラムを実践し、反省し、考え、実行する。プログラムが終る頃には、成長し大きく変わっています。このボランティアが今後も成長し、次世代のボランティアを育ててくれることを願っています。

最後に

この活動に対して喜ぶ事を悩む時もあり

ました。

元々は震災から始まり、辛い思いをしている方々もいます。それなのに、活動をして良かったね。笑顔を見れて良かったね。ではいけない気がしていました。そんな時に現地の方から、「辛い時もありましたが、受入れ地の方々からの愛情を受けて子ども達は育っています。こうやって遠い場所なのに繋がりができました。いつの日か、この子ども達が誰かの助けになれるように育っていると思います。ありがとうございます。」と言っていたいただき、救われた気がしました。

誰よりも得をしっているのは、私だと思えます。大勢の人と繋がれ、感謝し感謝され、たくさんさんの経験をしました。活動を継続し、この感謝の気持ちを伝えていこうと思っています。



ハイポーズ